

【下痢の定義】 Diarrhea, a flowing through

液状またはそれに近い状態の便が排泄される状態

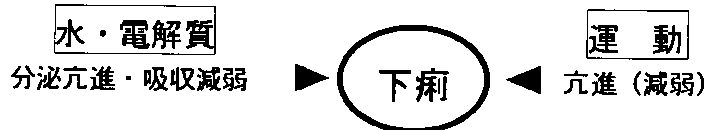
- ・糞便重量150～200g以上/24時間
- ・糞便液量150～200ml以上/24時間Ca

参照 正常糞便中水分100ml (約70%)

食肉中心 130g/日

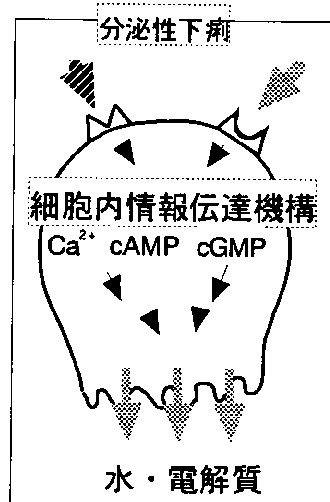
菜食中心 250～300g/日

【下痢のメカニズム】



【下痢の機序による分類】

1. 浸透圧性下痢
2. 分泌性下痢
3. 粘膜の障害
4. 濾過の亢進
5. 運動の変化



細胞内メディエーター

	cAMP	Ca	cGMP
内因性物質	VIP PGs ブラジキニン	Ach ヒスタミン セロトニン	ANP
細菌毒素	コレラ 大腸菌 (易熱性) サルモネラ カンピロ バクター	クロスト リジウム	大腸菌 (耐熱性) エルシニア クレブシエラ

【感染性腸炎における下痢のメカニズム】

1. 細胞内進入型細菌
2. 毒素産生型細菌

【消化管運動と下痢】

消化管運動におけるNOの関与

【下痢を来す疾患】

1. 感染性腸炎

- ウイルス性腸炎
- 細菌性腸炎
 - 1) 腸炎ビブリオ
 - 2) キャンピロバクター腸炎
 - 3) 病原性大腸菌
 - 4) サルモネラ腸炎
 - 5) エルシニア腸炎
 - 6) 細菌性赤痢
 - 7) コレラ
 - 8) 腸チフス
- 原虫
 - 1) アメーバ性赤痢

2. 炎症性腸疾患IBD

- 1) 潰瘍性大腸炎
- 2) クローン病

3. その他の炎症性疾患

- 1) 腸結核
- 2) 単純性潰瘍症－腸管ペーチェット
- 3) 虚血性大腸炎
- 4) 放射線腸炎
- 5) 腸管アミロイドーシス

4.腫瘍およびポリポーシス

- 1) 大腸癌 - 閉塞性大腸炎
- 2) Cronkhite-Canada症候群

5.内分泌異常

- 1) 甲状腺疾患
- 2) WDHA症候群

6.薬剤性

- 1) 抗生物質起因性腸炎
 - ・ 非特異性腸炎
 - ・ 出血性腸炎
 - ・ 義膜性腸炎
- 2) 抗癌剤
- 3) NSAIDs
- 4) その他

【経過による分類】

急性-慢性-再発・寛解を繰り返す

A 急性下痢

- 1) 非血性下痢、全身症状なし
下痢と便秘をくり返す。
ストレスに関係
誘因、旅行、食事、乳糖
薬剤
- 2) 非血性下痢、全身症状あり
食事の内容
地域、仲間、家族内発病
海外旅行、流行
発熱、嘔吐、筋肉痛など
腸疾患の既往歴、家族歴
- 3) 血性下痢、全身症状なし
体重減少、便通の変化
家族歴、既往歴
痔疾、肛門病変
- 4) 血性下痢、全身症状あり
汚染食物、集団発生、旅行
炎症性腸疾患の既往歴、家族歴
循環器疾患、糖尿病、便秘
薬剤の使用

B.慢性下痢

- 1) 非血性下痢、全身症状なし
下痢と便秘をくり返す。
ストレスに関係
食事、乳糖、薬剤
消化管手術歴
同性愛
- 2) 非血性下痢、全身症状あり
食事の内容
地域、仲間、家族内発病
海外旅行、流行、同性愛
腸疾患の既往歴、家族歴
合併症
- 3) 血性下痢、全身症状なし
体重減少、便通の変化
家族歴、既往歴、合併症
痔疾、肛門病変
- 4) 血性下痢、全身症状あり
炎症性腸疾患の既往歴、家族歴
合併症
便通異常、体重減少など

C 診断のポイント

1. 注意深い病歴聴取
2. 注意深い観察とLabo dataの評価
3. 治療前の便、血液培養
4. 大腸内視鏡と生検

【下痢の診断手順】

1. 病歴聴取のポイント

- 1) 経過：急性か慢性か
- 2) 便の性状（血性、脂肪便）
- 3) 随伴症状（発熱、体重減少など）
- 4) 流行状況

1. 急性か慢性か
2. 感染性か非感染性か

2. 診察のポイント

- 1) 全身状態の把握；発熱、心不全、脱水など
- 2) 皮膚所見

皮膚のスライド；1. Henoch-Schonlein症候群の皮疹、2. 潰瘍性大腸炎に合併した壊疽性膿皮症

3. 一般検査所見

- 1) 炎症所見
- 2) 貧血
- 3) 電解質
- 4) 生化学
- 5) 単純X線
- 6) 超音波検査
- 7) 便培養
- 8) トキシン
- 9) ウイルス

4. 精査

- 1) 大腸ファイバー
- 2) 注腸X線
- 3) CT, 血管造影

<炎症性腸疾患IBD>

内視鏡スライド1. 軽症潰瘍性大腸炎 びまん性発赤 2. 中等症潰瘍性大腸炎（出血）

内視鏡スライド3. クロウン病（数石状病変、縦走潰瘍）

<その他の炎症性疾患>

内視鏡スライド4. 腸結核（輪状潰瘍） 5. 著結核早期病変（輪状に並ぶびらん）

X線スライド1. 虚血性腸炎（拇指圧痕像）

内視鏡スライド6. 虚血性大腸炎（出血、浮腫、縦走病変）

内視鏡スライド 7. 放射線腸炎（血管増生）

内視鏡スライド8. 消化管アミロイドーシス（粘膜粗造、浮腫）

内視鏡スライド9. 赤痢アメーバ症（出血、浮腫、多発びらん）

<薬剤性腸炎>

内視鏡スライド10. 抗生物質起因性出血性大腸炎

内視鏡スライド11. 偽膜性大腸炎

内視鏡スライド12. NSAIDs大腸炎（多発びらん、小潰瘍）

【過敏性腸症候群】

目で見える病気、見えない病気

Functional Gastrointestinal Disorder

non-ulcer dyspepsia (NUD)

irritable bowel syndrome (IBS)

<IBSと鑑別すべき疾患>

内視鏡スライド13. mucosal prolapse syndrome MPS直腸粘膜脱症候群
別名 solitary ulcer syndrome 孤立性直腸潰瘍症

【止痢薬】

作用機序	種 類	薬 品
腸管運動抑制薬 腸管分泌抑制薬	アヘンアルカロイド	アヘンチンキ リン酸コデイン
	副交感神経遮断薬	硫酸アトロピン ロートエキス 臭化チメピジウム（セスデン） 臭化チキジウム（チアトン） 臭化ブチルスコポラミン（ブスコパン）
	交感神経刺激	ゲンノショウコ
	オピオイド作用薬	塩酸ロペラミド（ロペミン） マレイン酸トリメブチン（セレキノ）
収斂薬	タンニン酸	タンニン酸アルブミン（タンナルビン）
	蒼鉛剤	次硝酸ビスマス
吸着薬	天然ケイ酸	天然ケイ酸アルミニウム（アドソルビン）
殺菌・防腐薬		塩化ベルベリン・ゲンノショウコエキス（フェロベリンA）
整腸薬	乳酸菌製剤	酪酸菌（ミヤBM） ビフィズス菌（ラックB） ラクトミン製剤（バイオフェルミン）
抗菌薬		ニューキノロン薬；オフロキサシン（タリビッド） レボフロキサシン（クラビット） ホスホマイシン（ホスミシン）

【抗菌剤の使用】

初診時に決断が必要

1. 感染性下痢か非感染性下痢か
2. 抗生剤投与が必要な感染性下痢か

1. 症状がある場合抗菌剤が推奨される

Shigella
Clostridium difficile
Traveler's diarrhea
乳児のEPEC(Enteropathogenic
E.coli), EAEC(Enteroadherent)
EIEC(Enteroinvasive)
Sal. typhi
Virio cholera
Salmonella
*Entameba histolytica*など

2. 原則的に抗菌剤を使用すべきでない

viral diarrhea
軽症 *nontyphoidal*
Salmonella
ETEC O157

結局は細菌性腸炎を疑った場合、
ニューキノロンかホスホマイシンを投与することが多い

【過敏性腸症候群の治療】 下痢型-便秘型

<腸管運動障害の治療>

X線写真2. 下痢型の過敏性腸症候群にアセナリンが有効であった1例

X線・内視鏡写真3,4. チアトンが有効であった偽腸閉塞症の1例